

銭形平次捕物控

ヒ首の行方

野村胡堂

青空文庫

「八、居るかい」

向う柳原、七曲まがりの路地の奥、洗ひ張り、御仕立物と、紙に書いて張つた戸袋の下に立つて、平次は二階に聲を掛けました。よく晴れた早春のある朝、何處かで、寢呆ぼけた雄をんどり鶏どりが時をつくつて居ります。

「誰だえ、人を呼捨てにしやがつて、戸袋の蔭から出て、ツラを見せろ」

八五郎の長んがあひ顎あひが二階の窓へ出ると、満面に朝陽を浴び乍ら、眩まぶしさうに怒ど鳴なるのです。

「大層な見識だな、八」

「あ、親分ですかえ、こいつはいけねえ、又町内の餓鬼がき大將が、作り聲でからかつてゐるのかと思つて、——」

八五郎は面喰つて、階子段を二つづつ飛降りて來ました。

「本所の二つ目まで附き合はねえか」

「何處までも付き合ひますよ」

「それぢや大急ぎで朝飯を濟ましてくれ、此處で待つて居るから」

平次はさゝやかな四つ目垣にもたれて、芽を吹いたばかりの貧乏臭い草花などを眺めて居ります。

「それには及ぶものですか、朝飯なんぞ、昨日も喰ひましたぜ」

「あんな野郎だ、——面は洗つたことだらうな」

「それはもう、鹽磨きで、水の使ひやうが荒過ぎるつて、大家さんから小言をくひましたよ、何しろ若くて獨り者で、良い男だ」

「呆れた野郎だ」

「親分が一緒なら氣が強いや、いづれ歸りは幾代餅か、毛拔鮫か、——もゝんじい屋は少し時刻が早いが——」

「下らねえことを言はずに、空き腹を覺悟ならつて來い、だが、叔母さんが見えないぢやないか、家を空つぽにして出かけても大丈夫か」

「ちよいと隣へ頼んで行きませう、尤も泥棒に狙はれるやうな不心得な奴は、このお長屋には住んでゐませんがね」

八五郎はお隣の女房に留守を頼んで、平次の後を追ひます。

「ところでお前は、相生町の坂田屋といふ酒屋を知つてゐるのか」

兩國を渡ると、平次は思ひ附いたやうに、こんなことを訊くのでした。

「其處へ行くんですか？ 親分」

八五郎はひどく驚いたらしく、往來の眞ん中に立ち止りました。

「それが何うしたんだ、相生町の坂田屋に何んかあるといふのか」

「あつしも近いうちに一度坂田屋を覗く積りでゐましたよ」

「誰かお前を呼出した者でもあるのか」

「手代の喜三郎といふ良い男ですよ、手紙もよこし、本人も來ましたが、『どうも私は殺されさうな氣がして仕様が無いから、一度坂田屋を覗いて下さい——』といふんでせう」

「フーム」

「よくある冗談だから、あつしはまだ行つてやらなかつたんです、そこで親分を呼出

さうといふ悪戯でせう」

八五郎はすっかり呑込んだことを言ふのです。

「悪戯か本氣か知らないが、俺のところにも、助け舟を呼んで、二人から手紙が來たよ、

どつちも坂田屋のものが、手代の喜三郎では無いやうだ」

「へエ？　すると、坂田屋の者は三人も殺されかけてゐるわけですね、——親分へ手紙をよこしたのは、誰と誰です」

「坂田屋の内儀なひぎと、伴りうきちの柳吉だよ」

「へエ、驚きましたね、相生町の坂田屋といふと、本所でも評判の物持だが、その家がまるで死神に憑つかれたやうなものですね」

「兎も角行つて見よう、こいつは容易ならぬことかも知れない、——ところでお前へ來たといふ手紙は？」

「これですよ」

八五郎はでつかい煙草入から取出して平次に渡しました。

八つに疊んで先を曲げた半紙を開くと、中はかなり達者な帳面字で、

私事は先日親分様に無理を申上げ候相生町の坂田屋の奉公人、喜三郎と申すものに御座候、此間中から不氣味なこと相續き、今夜中にも殺されること必定と存じ候につき、親分様の御助けを頂き度く、くれ／＼も御願ひ申上候——

とかなりはつきりしたことが書いてあるのです。

「この手紙をいつ受取つたんだ」

「昨夜ゆうべですよ、二三軒飲み廻つて、家へ戻つたのは子こ刻のつ近かつたでせう、叔母さんが、手紙が來てますよと言つてくれたのを、階子段の途中で聞いて、今朝目がさめてから、受取つて讀むとこれでせう、もう間に合やしません」

「誰が持つて來たんだ」

「使ひ屋だつたさうですよ、吉原の女郎衆の色文から選より出したのが、この凄すじいやつで、尤も、天地紅の色文だつて、中味は大抵無心状に極きまつてゐるから、凄くないことはありませんがね」

八五郎の話には、また無駄が入ります。

「妙なことがあるものだな」

平次は考込んでしまひました。相生町の坂田屋から、三人の人間が、しかも同じ日に助けを呼んでゐるといふのは、どう考へても容易ならぬことのやうな氣がするのです。

「親分のところへ来た手紙は、どんなものです」

斯^かうなると八五郎の好奇心も相當のものでした。考込んでしまつた平次の前へ、手を出したり引込めたりして居ります。

「これだよ」

平次は紙入に挟^{はさ}んで置いた、二枚の紙^{かみきれ}片^をを取出して、八五郎に渡しました。

「こいつはあつしに讀めませんよ、喜三郎のはまともな日本の文字だけれど」

八五郎は煙たい顔をして、小菊に書いた女文字を、ためつ透^{すか}しつするのです。

「それだつて日本の文字だよ、變體假名交りの草書^{さうしよ}だけれど、オランダや天竺^{てんぢく}の文字ぢやねえ」

「へエ、厄介ですな」

「女文字の方は相生町の坂田屋の内儀の手紙で——今夜といふ今夜、私は命を狙はれて居ります、なにとぞ親分様の御助けを、と書いてある」

「へ、成程ね、さう言はれると、さう讀めないこともありませんね」

「もう一枚は——大福帳を千切つた東山^{ひがしやま}半紙^{はんし}に、——助けてくれ、私は今夜殺される、

——とたつたそれだけ、端^{はし}つこに、相生町坂田屋倅柳吉と走り書きしてあるが、ひどくあ

わてたらしい」

「使ひは？」

「内儀の方は、小僧が格子かかしから投り込んで行つたが、倅せがれの手紙は宵の口に、お勝手の入口へ、石つころを載のせてあつた相だ」

「で？」

「俺も八丁堀の笹野の旦那のところへ呼ばれ、御馳走になつた上、いろく相談を持ちかけられ、戻つたのは亥刻よつ過ぎだ、お前でも居れば、直ぐ相生町まで飛んで貰ふところだが、こんな手紙には悪いたづら戯つらが多いから、酔よつた勢で寝てしまひ、今朝になつて、妙に氣になり出したといふわけさ」

「へエ？」

「今朝になつて、妙に氣になつてならねえから、朝の仕度もそこく飛出したのよ、お前のところへも、變な手紙が舞込んでゐると聴くと、こいつは一度覗いて見るのも無駄ぢや無からう」

「死神に憑つかれたのが三人、今頃は手遅れになつたか、それとも首尾しゆびよく錢形の親分をおびき出して、手を拍うつて笑つて居るか」

「そんなことなら宜いが」

「おや、向うから来るのは、石原の親分のところの、お品しなさんぢやありませんか」

「成程、お品さんだ、大層急いでゐる様子だが——」

平次に取つては大先輩の御用聞、石原の利助が中風で寢込んでしまひ、その娘のお品が氣性者で、出戻りでもど乍ら二十四五の良い年増盛りを、なり振り構はず、子分達を引き廻して、父親の利助の十手を守り通して居る姿だつたのです。

「ま、錢形の親分、丁度宜いところで」

川岸端かしづぶちを急ぎ足で來たお品は、平次と八五郎の姿を見ると、足を停とどめて、さすがに胸を押へました。

「こんなに早くから、何處へ行くんだ、お品さん」

「明神下の、親分のところへ、——現場うちに家の若い者も來て居ますが、錢形の親分さんを呼んで頂き度いと、手代の喜三郎がたつて言ふものですから」

「それぢや、相生町の坂田屋に、何んか間違ひでもあつたのか」

「よく御存じで、——倅の柳吉が殺やっされましたよ」

「あゝ矢張り」

八五郎は下手な八卦が當つたやうな顔をするのです。

三

相生町四丁目、たてかは豎川に臨んで、坂田屋はなか／＼の繁昌した酒屋でした。主人の兵左衛門は、五十を越したばかりですが、心の病しんやまひの持病があつて、寝たり起きたり、奥は若くて美しい後妻のお濱はまが采配さいはいを振ひ、店は叔父と言つても、遠縁の掛り人うづけい惠之助と、働きの手代の喜三郎に任せて、手堅い商賣と、古い暖簾のれんの誇を持ち續けて居ります。

「おや、錢形の親分が」

遠くから、手代の喜三郎が見附けると、ザワザワと店中が賑にぎやかになり、叔父の惠之助が外へ飛んで出ました。

「親分さん、飛んだ御手数で、でも、よくお迎へが間に合つたことで」

薄禿げの四十前後、精力的な感じのする中年男です。

「其處でヒヨツクリお品さんに逢つたのだよ」

平次は巧みに誤魔化ごまかしてしまひました、三つの手紙のことは、人に知られなくなつた

のでせう。

「では、どうぞ此方へ」

惠之助は、何が何やらわからずに、店の外を廻つて、裏の方へ案内しました。かなり大きい母屋おもやですが、家族が多いので、殺された俵の柳吉と、案内して居る叔父の惠之助は、二人だけ母屋に廊下で續いた離屋に寝んで居ります。

「今朝、雨戸を開けてくれた下女のお時の聲に驚かされて、二階から降りて來ると此有様で――」

惠之助が自分の口から斯かう説明するのです。離屋の階下したは六疊と二疊の二た間だけ、二疊には大きい押入が附いてゐてそれが納戸代りに使はれて居る様子です。

その奥の六疊の、裏に向いた腰の低い窓は明いて、それを背にして、若旦那の柳吉は、まだ赤あけに染んだまゝ死んでゐるのです。

二十三になつたばかり、それは良い男でした。色白の細面で、女の子に騷さわがれさうなのは瑾きんですが、こんな男が思ひの外の激情家にある型です。身み扮なりはキチンとして、袷あじも羽織も清らげに、傍に置いた紙入は、その頃でも贅ぜいたく澤たくにされた縫ぬいひつぶしの紺の大ぶりなもの、中に小判五十兩と、二三兩の小粒の入つたまゝなのが氣になります。

紙入の下には、八つに疊んだ眞新しい手拭と、一と折の懷ろ紙。
をりふとこ

「まるで、旅にでも出かける装束ぢやないか」
しやうぞく

平次がさう言つたのも無理のないことでした。

死骸の傷は、右の首筋を深々とゑぐつたもので、見事に大動脈を切つてあり、前
だいどうみやく
 のめつて居たのは、後ろから突きめしたか、それとも背中に窓の敷居が當つたため
 であらう。

「錢形の親分、ヒ首あひくちの鞆は疊の上に落ちて居ましたが、中身は見えませんな」

死骸の番をして居た、石原の子分がさう言ひます。此時はもう、後のことを平次に引繼
 いで引込思案のお品は歸つてしまつた様子です。

「鞆には血の跡は無かつたのか」

「この通りで」

子分は鞆を取出して見せましたが、念のため懷紙で拭いて見ても、それには血の跡もあ
 りません。

「お前さんは、同じ離屋はなれに寢泊りして居て、階下したで人一人殺されるのを、知らなかつた
 いふのか」

平次は眞つ正面から惠之助の表情を見つめました。

「何んにも存じません、私は目ざとい方ではございませんが、それでも、喉を掻き切られて死ぬまでには、少しは聲を立てるとか、物音をさしたことゝ思ひますが——」

惠之助は自分の不爲なことを、大した潤色もせずに言ふのです。

「死骸は、最初から仰向になつてゐたのか」

「へエ、その座布團の上に顔を埋めて、俯向になつて居りました」

さう言へば柳吉の前には、存分に血を吸つて蘇芳すほうに漬けたやうな、木綿物の座布團が一枚あります。

「これが一番先に見つけたのは？」

「下女のお時でございます、呼んで参りませうか」

平次がうなづくのを見て、惠之助はお勝手の方へ行きましたが、その間に八五郎は、何やら平次にさゝやかれて、何處ともなく飛んでしまひました。

四

「私に用事があるといふのは、お前様けえ」

三十二三の、それは勇敢ゆうかんな山出やまだしでした。

「若旦那が死んでゐるのを見附けたのはお前だつてね」

「その通りですよ」

「時刻は？」

「明るくなると、私は家中の雨戸を引くだ、もつと寝かしてくれなんて言つたつて、承知しねえことにして居るよ」

「で？」

「離屋へ來ると、向う側の雨戸は開いて、窓の下に若旦那様が、血だらけになつて死んで居るでねえか、膽をつぶして大きな聲を出すと、二階から番頭さんが降りて來たゞ」

番頭といふのは、言ふまでもなく叔父の惠之助です。

「番頭さんは朝は早い方か——もつと寝かして置いてくれなどといふのは、まさか番頭さんぢやあるまいな」

「頭の禿げた、よく肥ふとつた中年者は、大喰ひだから、朝寢坊あそにきまつて居ますだよ、二階から降りる時だつて、帯おびひろ解とけて、眼やにだらけで」

「よし、わかつた、お前は番頭さんとは餘つ程仲が悪さうだな」

「冗談におらを口説くから、あの助平野郎は大嫌ひだよ」

「これ／＼何を言ふんだお時」

廊下から黙つて居られなくなつて聲を掛けたのは、その噂の惠之助でした。

「まあ、宜い、おかげでお前さんは下手人でないとわかつたやうなものぢやないか」

「へエ？」

平次の言葉を、惠之助は呑み込み兼ねた様子です。

「夜中に人を殺した人間が、眼やにだらけになつて、樂寢をして居るものか、——悪口を

言はれるのも、何んかの役には立つぜ」

「へツ、そんな事で」

叔父の惠之助は撥ぐつ度い顔をして黙つてしまひました。

「ところで、昨夜、一番後で、若旦那の姿を見たのは誰だ」

平次は問を改めました。

「私かも知れませんかよ、亥刻（十時）近くなつて、雨戸を閉めに來ると、窓を開けたまん

まで、その窓際に凭れた若旦那が、薄寒いのに後ろから月の光を浴びて、灯もつけずに考

へ事をして居ましたが、私が、窓の戸を閉めませうかと言ふと、後で俺が閉めるから、此まゝにして置いてくれといふから、黙つて母屋おもやへ引返してしまつたゞ」

「それつ切りか」

「それつ切りだが、様子に變なところがあつただよ、若い人が灯もつけずに、薄寒い窓で考へ事をして居るのも變だし、今朝になつて見ると、窓の外に若旦那の草履が揃へてあるでねえか」

「その草履せうりはどうした」

「草履には血が附いて居たし、その草履の側にも、血の附いた紙切が落ちて居たやうに思ふけれど、少し目を離してゐるうちに、誰が片附けたか見えなくなつただよ」

「その紙切の中をお前は見なかつたか」

「手紙か何んかだよ、見たつて私には讀めやしません」

「そいつは惜しかつたな」

平次はひどく口惜しがりました。

「尤も、小僧の佐吉どんが見たかも知れませんが、あの子はたつた十六だけれど、物の本が好きで、四角な字も讀めるから」

「そいつは有難い、早速小僧の佐吉を呼んでくれ」

平次は救はれたやうな心持でした。その血染の草履と側にあつた、手紙らしいものを見さへすれば、事件が苦もなく解決するやうな氣がしたのです。

「親分さん」

不意に聲を掛けたものがあります、それは少し骨張つては居るが、蒼白い若い男、
「手代の喜三郎ですよ」

此時戻つて來た八五郎がそつと囁いてくれます。

「相濟みません、私は怖こはかつたんです」

「どうしたといふのだ、皆んな話して見るが宜い」

「窓の外にあつた草履と、血の附いた紙片を隠したのは、この私でございます」

「何を言ふのだ」

平次もさすがに驚きました。手代の喜三郎は容易ならぬことを打ち明けようとして居るらしく、緊きん張ちやうし切つて、ワナワナ顫ふるへてさへ居るのです。

「悪いことで御座いましたが、若旦那の書いたものを、この私が隠してしまひました、この通り、思ひも寄らぬ怖おそろしいことが書いてあつたのでございます」

「どれ」

平次は喜三郎の差出した、一枚の半紙を取上げました。その端つこには不氣味な血がにじんで居り、文面もひどく亂れて居りますが、

——今夜、私は喜三郎に殺されるかも知れない、どうもそんな気がしてならない——と讀めるではありませんか。

「草履は此處にございます、血が附いて居りますが、新らしい草履で、若旦那はこれを履いて逃出す氣だつたに違ひありません」

手代の喜三郎は斯う言ひ切つて、安心したやうにホツと太息をつくの**と**いす。

五

「それぢや詳しく聴かう」

平次は多勢の人を追つ拂つて、手代喜三郎とたつた二人になつたのを見極めると、新しい問を進めました。

「どんなことを申上げれば宜いでせう親分」

喜三郎は神経質らしく小鬢こびんを搔かいたり、襟を直したりして居ります。蒼白あをしろいお店者たなで、いかにも弱々しく善良さうでさへあります。

「お前は何だつて、八五郎のところへ行つたり、今晚殺されるかも知れないなどと、物騒な手紙を出したんだ、——一方殺された若旦那はあべこべにお前に殺されるかも知れないと言つてゐるぜ」

平次は遂に訊くべきことを訊かうとしたのです。この謎が解けないうちは、柳吉を殺した厄介な謎は永久に解とけさうにもありません。

「私は、若旦那に殺されかけて居りました」

「何？」

「二度も三度も、私は殺されかけました、若旦那に頼まれた土地のやくぎ者に取巻かれて、命辛々逃出したり、物置の中で、上から重いものを落されたり」

「それはどういふわけだ」

「若旦那は、大旦那の眞實ほんたうの子ではなく、遠い御親類から貰はれた人ですが、後添あとぞの御内儀と仲が悪い上、近頃大旦那に逆さからつてばかり居りますので、明日は親類の方々を呼んで、その席上で離縁になることに決つて居りました」

追ひ出される前の若旦那の柳吉が、何を企らんだか、平次にも想像が出来ないことはありません。

「で？」

平次は熱心に先を促しました。この手代の打明け話が、餘程面白かつた様子です。

「若旦那はそれを、私とお内儀さんのせめだと思ひ込みました。私はこの家の遠縁で、お内儀さんと血の繋りがあるのです、お内儀とぐるになつて、お嬢さんを手に入れ、この家の跡取にならうとして居ると思ひ込んだのでせう」

「――」

「若旦那は取引先の義理で近頃この家に入った養子ですが、私は白雲頭しらくもあたまからの奉公人で、お嬢さんのお葉さんとは主従とは言つても幼な馴染なしみも同様、自然親しくも口をきいて居ります。主従の義理と、友達のやうな親しさと、男と女の間の戀心とは、みんな違つたもので御座います。若旦那はそんな事までは氣が廻らず、一途いっずに私を怨んで、明日はいよいよ親類會議を開いて、自分が追ひ出されるときまると、日頃の氣象では何をやり出すかわかりません。今夜一と晩の恐ろしさに、私は八五郎親分にあんな手紙を差上げてしまひました」

「私は若旦那に殺されるやうな氣がしてならなかつたのです。で、店二階へ一人で寝るのが怖さに、小僧の佐吉に頼んで、一と晩だけ、同じ部屋で一一緒に寝て貰ひました、裏の佐吉の部屋です、これは當人の佐吉に訊いて下さればよくわかります」

手代の喜三郎は、重荷をおろしてもしたやうに、ホツと肩を落しました。若旦那の柳吉が何を書かうと、裏の小部屋に飛込んで、小僧の佐吉と一緒に一と晩を過したとわかれれば、この男は下手人の疑から除外されることになるでせう。

「その小僧の佐吉は？」

「十六になつたばかり、眠いのと食べたいだけの年頃ですが、不思議に目ざとい子で、昨夜も私が少し腹加減が悪くて、お下へ行つた時も、眼をさまして、聲を掛けて居りました」

「あとで、その佐吉とかいふ小僧さんに逢つて見よう、ところで、若旦那は窓の中で自分で首筋を切つて死んでゐるのに、窓の外から庭へかけて、ひどく血がこぼれてゐるのはどういふわけだらう」

平次は先刻からそれを氣にしてゐたのです。縁の下の草履に血が附いてゐたばかりでなく、庭石も垣根も、犬小屋も羽目板も、まことに斑々たる血で、故意にブチ撒きでもしな

ければ、こんなに血がこぼれる筈はありません。

「私もそれに氣が附いて居りました、今朝早く若旦那の死んでゐるのを見附けたときから、此通りでございます、ことに、犬小屋に居た筈の白犬が、綱つなを切つて飛出し、血だらけになつて居りました」

「その犬は何處に居るんだ」

「何處かへ行つてしまつたやうで、ちよいとお待ちを願ひます、癖の悪い犬ですから、見附けて参りませう」

喜三郎はそんな事を言つて、外へ出て行きました。

「ね、親分」

その間に八五郎は、平次の側そばににじり寄つて、耳に口を持つて來ました。

「何んだ、何んか面白いことがあつたのか」

「面白いことばかりですよ、第一、此家のお嬢さんといふのは、そりや大變」

「何が大變なんだ」

「十八になつたばかりといふのに、なか／＼の確りもので、若旦那の柳吉は、手代の喜三郎に殺されたに違ひない——とはつきり言ふんです」

「フーム、たつた十八の小娘が、そんな大膽なことが言へるのかな」

「逢つて見て下さい、きりやうは大したこともないが、妙に鋭いところするとがあつて、磨ぎすました刃物のやうな娘ですよ、そのくせ滅法可愛らしいところがあつて、あの娘に惚れると、怖いことになりさうですな」

八五郎は一とかど女を知り抜いてでもあるやうなことを言ひます。

「いろ／＼うるさい事がありさうだな、兎も角、一應皆んなに逢つて見るとしよつか」
平次も此邊で、定石通り運んで見る氣になつたのです。

六

主人の兵左衛門は二三日は容態が悪い上、養子の柳吉の變死で、すつかり興奮してしまひ、朝から内儀のお濱と、娘のお葉が付きつ切りで介抱して居りました。平次はわけを話して二人の女を遠ざけ、ほんの一寸だけといふ條件で、寝たまゝの病人と相對したのです。「この通りの不體裁ふていさいなどころをお目にかけて相濟みませんが、何分少しのことでも、動ど悸うきがひどくなりますので」

兵左衛門はさう言つて、僅かに枕から顔を上げました。蒼黒いむくんだ顔を見ただけでも、これはなかくの容體といふことが、素人の平次にもわかります。

「飛んだ人騒がせで、お氣の毒でしたね、——早速二つ三つ訊かして下さい」

「へエ、へエ、何んなりと、私の存じて居ることなら」

「養子の柳吉さんを、今日は親類會議を開いて、離縁りえんすることになつて居たさうですね」

「へエ、それに相違ごいけません、今日親類方に寄つて頂く筈でしたが」

「何んか氣に入らないことでもあつたので？」

「氣に入らないことばかりで御座います。死んだ者の事を悪く言ふやうですが、金費かねづかひが荒い上に、酒呑みで、勝負事が好きで、それに、私の家内、柳吉の爲には母親になるお濱との仲がうまく行きません」

「それ丈けのことで」

「それから一番いけないのは、店の金を三百兩ほど持出して、私にも相談をせず、實家の仕事に融通ゆうつうしてしまひ、その仕事も縮尻しゆくじつてしまつて、取り返す當あても無くなつてしまひました。これは商人の養子として、一番慎しんしまなければならぬことで御座います」

「成程、さう言ふものですかね」

「養子の柳吉を鼻^{ひなき}肩^{かた}にして居るのは、娘のお葉^{えふ}位^{くらい}のもので御座います、許^{いひなづけ}婚^{こん}の仲^{なつげ}ではあるが、あれは妙に氣が合ふ様子で」

「そのお嬢さんは、昨夜^{ゆうべ}、此室^{へや}を動かかなかつた相ですわね」

「私の看病には、娘が一番で、これは家内もうまく行きません、氣分のひどく悪い時や、一と晩寝つかれない時は、氣の毒だが、娘に看^{かん}病^{びやう}して貰ひます、昨夜^{ゆうべ}も宵^{よひ}からひどく氣持が悪くなつて、夜の明けるまで、娘を側から離しませんでした」

「いや、よくわかりました、ではお大事に」

平次はそんな事で切上げる外は無かつたのです。

病間を出ると、薄暗い廊下で、誰やら小手招きして居ります。それに誘^{さそ}はれるやうに、そつと納戸に滑り込むと、其處には若い娘が、世にも緊張した顔をして、平次を待つて居るではありませんか。

「お嬢さん？」

「内證で申上げ度いことがあるんです、聽いて下さるでせうか、錢形の親分」

お葉は少し息を弾^はませて居ります。十八といふにしては、やゝ小柄ですが、表情にも仕事にも、子供らしい破綻^{はたん}はなく、いかにもませた感じでした。きりやうは決して良い方では

なく、淺黒い顔と、大きい眼が印象的で、赤い唇の曲線が、妙に情熱を感じさせます。

「お嬢さんは、昨夜は旦那の病間で、一と晩過したんでせう」

「え、何處へも出られなかつたんです、父の病氣も悪かつたけれど、私が逃出さうとするのを氣取つて、母さんが動かさなかつたんです」

「逃げる？」

「え、私と柳吉さんは、昨夜、此家を逃げ出す約束だつたんです」

「それは、本當か、お嬢さん」

平次も大方は察し、喜三郎の言葉にもそれは匂ひました。前後の様子を考へると、娘の飛躍的な言葉も、決して出鱈目とは言へません。

「明日の親類方の寄合で、あの人は追出されるにきまつて居ます、私が何んと言つても通ることではございません、——坂田屋の身しんしやう上はどうでも宜いが、お前とは別れ度くない、二人で此家を逃出して、木更津の叔母さんを頼つて行き、暫らく成行を見よう——といふことになりました。父はたつた一人娘の私を捨て切れる筈も無いし、精々半年か一年の辛抱で何うかなることだらうと思ひ、二人はそつと旅仕度をし、夜中に家を逃げ出す約束でした、それを感附いた様子で、母さんはどうしても、父の病間から出してくれず、氣

を揉みながら、夜を明してしまひました。するとあの騒ぎです、肝心の柳吉さんは殺されてしまつて——」

張り詰めた氣もゆるんだか、お葉はシクシクと泣くのでした。氣象者らしい娘が、意氣地もなく居崩れて、それはいかにも哀れ深い姿です。

「それで、いろいろの事がわかつたが、柳吉を殺したのは、喜三郎に違ひないと、お嬢さんは言つた相ぢやないか」

「申しました、全くそれに違ひないのです。——あの人は怖い人です、母さんの遠縁で、この家の跡取をねらひ、柳吉さんを追出しにかゝりましたが、私がどうしても柳吉さんを諦らめないのです、たうとう柳吉さんを殺してしまつたに違ひありません。あの人を縛つて下さい、親分」

お葉は必死と絡むのです。身體は二三尺離れて居りますが、此小娘の意志の力は相當で、ガイガイと平次を引摺つて行きます。それは泣き濡れた眼でも、可愛らしい唇でもなく、この娘の持つて居る、人並すぐれた全身的の氣力とも言ふべきでせうか。

「親分さん、何んか御用で？」

内儀のお濱は縁側に膝をつきました。三十そこくの磨き抜かれたやうな年増で、かりそめのポーズも、なか／＼に氣のきいた美しさです。

「若旦那の柳吉さんは、お嬢さんとしめし合せて、昨夜此家を逃出す氣だつた相ですね」
ズバリと言つてのけると、

「私もそれを心配して、一と晩あの娘から眼を離さないやうにして居りました」
内儀は驚く色もなく、斯う自然に答へるのです。

「私の家へ、あんな手紙を届けたのは、どういふわけでした」

小菊に書いた、エスオーエス S O S、これは冗談や悪戯いたづらでは濟まされません。

「最初、娘と柳吉と、二人で逃出す相談があるとは氣がつかず、柳吉の様子が變なのと、何んとなく果し眼まなこだつたので、明日の親類方の相談の前に、私が殺されるのかと思ひまして、——親分さんのところへ、人騒がせな手紙などを差上げて、後悔いたしましたがお濱はしをらしく首を垂れるのです。

それから平次は、小僧の佐吉を捜して、漸く物置に居るのを見附けました。

「ちよいと、聴き度いことがあるが」

「へエ、どんなことでせう」

十六の中僧と言つて良い位、あまり賢かしこくは無ささうですが、身體は相當です。

「お前は昨夜、番頭の喜三郎さんと同じ室に寝たんだつてね」

「へエ、——まだ宵よひのうちでしたが、今夜はイヤな事があるから、氣の毒だが此處へ泊めてくれと言つて、自分の夜具と布團はこを運んで來ましたよ」

「夜中に起きなかつたのか」

「私は起きませんが、番頭さんはお腹が悪いとかで一度起きたやうです、でも、私は一度目を覺したけれど、直ぐ眠ねてしまつて、床へ戻つたのは知りません」

「夜中に犬は吠ほえなかつたか」

「氣がつきませんよ」

「あの犬は癖くせが悪い——と番頭さんは言つて居たが、そんなに癖くせが悪いのか」

「外の者にはよく吠ほえますが、若旦那と番頭さんと私にはよく馴なれて居ます」

「何處つなに居るんだ、お前は知らないか」

「夜は繫つないで置くんですが、今朝は犬小屋には居なかつたやうです、それに綱つなも變つて居

たやうです」

「犬を縛つてある綱が變つて居たのか」

平次は何やら考へて居ります、が、丁度その時、

「錢形の親分、——妙なものが見附かりましたが」

番頭の喜三郎は、事あり氣に飛んで來たのです。

「？」

「裏の荒物屋の生垣いけがきに、これが絡からまつて居た相です」

「ヒあひくち首ぢやないか」

「しかも血と泥まみに塗まみれて」

手に取つて見ると、長々と紐ひものついたヒ首で、刃には斑々はんくたる血が附いて居り、紐も

所々血まみに塗まみれて、三尺ほどのところでフツと切れて居るのです、

「あツ、今朝犬を繫つないでゐたのは、その紐ひもですよ」

小僧の佐吉は素すつ頓とんきやう狂きやうな聲を出します。

「こいつは一體どういふわけでせう親分」

その後ろから長なんがい顎あごを出したのは八五郎でした。

「曲者は、若旦那を殺した後で、血のついた匕首を、犬を縛った紐に結んだわけだ」

「どうして、そんな事をしなきゃならなかったんでせう」

八五郎は尚ほも追及しました。

「得物を隠したかったのかな、犬を繋いだ紐に結んで置くと、犬は何處かに持つて行くに違ひない、——それにしても鞘を取つて置いたのはどういふわけだ」

この謎は平次にも解け相ありません。

「親分、素人量見ですが、私も考へたことがございません、申しても宜しいでせうか」

番頭の喜三郎は恐る／＼顔を出しました。

「宜いとも、思つたことがあるなら、遠慮をせずに話してくれ」

「それでは申しますが、若旦那は、お嬢さんと夜逃げの約束をしたが、何時まで待つてもお嬢さんが來なかつたので、お嬢さんが心變りをしたものと早合點し、明日の親類方の御相談のことも考へて、フラフラと死ぬ氣になつたのぢやございませんか」

「？」

「その證據は、匕首は若旦那の品で、犬を縛つてある紐も、太くて丈夫なのを止して、細くて引けばすぐ切れさうなのと變つて居ります、それから——」

「?」

「若旦那を殺した下手人が外にあれば、刃物なんか、隠したければ自分で持つて逃げるか、すぐ前のたてかほ豎川に投り込めばすむことです。刃物——が死骸の側にころ轉がつて居れば、すぐ自殺とわかつてしまひますから、よく馴れた白犬しろの紐ひもを變へ、自分の首筋を斬つた苦しい中から、匕首を犬の首の紐に結んで追ひやつたのぢやございませんか」

喜三郎の智恵のたく逞ましさに、平次は少しお株かぶを取られた様子です。

「若旦那がどうして、そんな細工をしなければならなかつたのだ？」

「私を下手人にし度かつたのでございませう、若旦那は私が憎くてたまらなかつたのです、——この家を追ひ出されるのも、私のせゐだと思ひ込み、坂田屋の身上も、お嬢さんのお葉さんも、私に奪とられるに違ひないと思つたことでせう、——私は最初は若旦那に殺されるに違ひないと思ひました、あの眼の色は容易でなかつたのです」

喜三郎はホツと大きく溜息ためいきを吐つきました。平次の叡智えいちを征服した、この男の智恵の逞ましさに、八五郎も小僧の佐吉も、あつけに取られて聽いて居ります。

後ろの障子が動いたやうです。チラリと人の影がさしました、娘のお葉も、其處で黙つて聽いて居たに違ひありません。

八

平次はそれつ切り本所を引あげてしまひました。八五郎は不服らしい顔をして居りますが、若旦那の柳吉が自害したのだとわかると、誰を縛りやうもありません。

「あれで良いのですか、親分、あつしには腑ふに落ちないことばかりですが」
時々思ひ出したやうに、平次に訊ねましたが、

「いや、——時節を待つ外はあるまいよ」

平次の應こたへにも妙な含ふくみがあります。

それから暫く經つと、相生町の坂田屋で、新しく養子がきまつたといふ噂が傳はりました。その養子——行くくは娘のお葉えふの婿むこになるのは、手代の喜三郎だつたことは言ふまでもありません。

「親分、大變なことを聴き込みましたよ」

八五郎が飛込んで來たのは、それから又一月も後のこと、世の中はもう晩春——初夏といふすがくしい時分のことです。

「どうしたんだ、八」

「こいつは本物の大變ですよ、坂田屋の婿むこにきまつて、いよく祝言しゅうげんといふ前の日、あの手代の喜三郎は毒を呑んで死んでしまひましたぜ」

「何んだと？」

平次にもそれは豫想外でした。富貴と美人と一緒に手に入れた喜三郎が、祝言の前の晩自害するといふことは、どう考へたところで承服の出来ないことです。

「行つて見よう、そいつは何んか曰くがありさうだ」

「果報過ぎてフラフラと死ぬ氣になつたんですね、親分」

「人間は果報過ぎて死ぬものかな」

「さうでせうか」

二人が相生町の坂田屋につくと、店は重なる不幸にごつた返して居りましたが、店に入ると、もう一度、娘のお葉が、チラリと姿を見せて、何處かへ隠れてしまひました。

「これは、錢形の親分、飛んだお騒がせをしますが、今度は間違ひもなく、喜三郎が自分で毒を呑みましたんで」

迎へた番頭の恵之助けいは、苦笑にがわらひをして居ります。

「兎も角も、佛様を一と目見たいが」

「へエ宜しう御座いますとも、どうぞ此方へ」

喜三郎の死骸は入棺して内儀のお濱が線香などをあげて居りましたが、平次と八五郎の姿を見ると、ツイと縁側へ出てしまひました。

「死ななきやならない事でもあつたのかな」

「飛んでもない、明日はお嬢様と、祝言しうげんときまつた喜三郎が、死ぬ氣になる筈はございません、昨夜風邪の氣味だと言つて呑んだ玉子酒に鼠捕りが入つて居た様子で」

「？」

「主人がやかましくて、此家ではそんな物ぶつさう騒さわなものを買った覚えはありませんので、いろ／＼薬屋で調べましたところ、二た月ばかり前に、喜三郎が自分で石見銀山いはみぎんざんを買つたことがある相です、多分それを、風邪薬かぜぐすりと間違へて呑んだことせう、何しろ明日祝言といふので、氣持も上吊うはつつて居りましたから」

「傍そばには誰も居なかつたのか」

「お嬢様が、何彼と明日のことを相談して居たやうです、花嫁花婿と言つても、内輪のことでですから、遠慮はありません」

「そのお嬢さんの見て居る前で死んだことだな」

「へエ、まア、そんなわけで」

「そのお嬢さんに逢ひ度いが」

「先刻、親分さん方の顔を見ると、あわてゝ、二階の御自分の部屋へ行つたやうで——」
「それ行つて見ろ」

平次と八五郎は二階へ飛び上りました。いきなり障子を開けると、正面の長押ながおしにブラ下がった、絢爛けんらんたるもの、それは娘のお葉が、自分の扱帯しきぎで首を吊つて居た姿だつたのです。

取おろして介抱すると、幸ひ早く手が廻つたので、間もなく息を吹き返し、不思議さうに四方を見廻して居ります。

「お嬢さん、心配することは無いぜ、二人の許いひなづけ婚けに死なれて氣を落すのも無理もないが親孝行でもして、百までも生きる工夫をすることだ——それぢや俺は歸るよ、宜いか、お嬢さん、死ぬ氣なんかになつちやいけないよ」

平次は驚いて飛んで來た繼母のお濱にお葉を引渡すと、八五郎を促して、本所の往來へ、呑氣さうに踏出すのです。

「親分、これで宜いんですか、ね、親分」

八五郎は後から追つかけます。

「宜いんだよ、解つて居るよ」

「喜三郎は本當に自害したのでせうか」

「いや、そんなことがあるものか、喜三郎は殺されたのだよ」

「へエ？」

「誰にも言ふな、最初若旦那の柳吉は、手代の喜三郎に殺されたのだ。犬の綱つなにヒ首あひくちを結むすんだのは、喜三郎の細工さいくだよ、小僧の佐吉と一緒に部屋で寝て、夜中に拔出して仕事をしたのさ」

「へエ」

「首尾よく俺を言ひくるめた積りで居たらしいが俺は潮時しほときを見て居たのだ。が、あの娘は我慢が出来なかつた、喜三郎と祝言する事を承知して油断させ、いよく祝言の前の晩になると、切羽詰せつぽつまつて風邪薬と鼠捕りを摺すり換かへ、喜三郎を殺して柳吉の仇を討つたのだ」

「へエ、あの娘がね」

「あの娘は氣象者だ、それ位のことはやり兼ねないが、俺が坂田屋へ行つたのを見ると、さすがに氣がとがめて、死ぬ氣になつた」

「それぢや、あのまゝ許してやるわけで」

「許しやしないよ俺は——この錢形平次は何にも氣が附かなかつたのさ、柳吉の死んだのは自殺、喜三郎の死んだのも果報負けの自殺」

「お葉が首を吊つたのは？」

「許婚が二人死ねば、若い娘はそんな氣にもなるだらうよ」

「へエ、呆れたものだ」

「呆れついでに一杯つき合へ、今日は幸ひ少し持つて居るよ」

平次はさう言つて、懐ふとこの中の小錢こせにを鳴らすのです。それを投はらずに濟んだのが、反つて嬉はしさうでもあります。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第五卷 蟬丸の香爐」同光社磯部書房

1953（昭和28）年5月25日発行

1953（昭和28）年6月20日再版発行

初出：「オール讀物」文藝春秋新社

1953（昭和28）年4月号

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2015年5月6日作成

2017年3月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

ヒ首の行方

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>